校長室より

「二松から飛翔へ」～ 一期一会 ～

二松学舎大学附属高等学校
校長　鵜飼敦之

部活動観戦記

～男子バスケットボール部　新人戦～

10 月 19 日（日）、朝からどんよりとした雲が垂れ下がる中、男子バスケットボール部の第１支部新人大会の応援に出かけました。会場の蒲田高校は私の多摩の自宅からはずいぶんと距離があるのですが、数日前、ある部員が笑顔で「校長先生、僕らの新人戦、見に来てくださいよ」と声をかけてくれた、その一言に背中を押されました。

男バスは、限られた練習時間や場所の制約を工夫で乗り越えています。地下体育館での早朝練習もその一つ。朝の静けさの中で、ボールの弾む音と掛け声が響く光景を何度か見てきました。

中間試験が終わった翌日という厳しい日程の中、試験期間中も特別に調整練習を行い、体力とチーム力を整えて臨んだ今回の試合。事前に木村先生から「くじ運があまりよくないんです。都立総合工科高校は強豪ですよ」と聞かされていたので、正直なところ、少し心配な気持ちもありました。

しかし、試合開始の笛が鳴った瞬間、その不安は吹き飛びました。序盤から二松学舎の選手たちは積極的に攻め込み、テンポよく得点を重ねます。それでもベンチからは「もっと早く！」の檄が飛びます。第１クォーターを 23 対 14 とリードで終え、第２クォーターも 37 対 28 で折り返し。「これはいける！」という空気が漂いました。ただ、一方で決めきれなかったシュートも多く、「もう少し点差を広げられたのに」と惜しく感じる場面もありました。

後半に入ると流れが一変。相手校のプレッシャーが強まり、足を痛めてベンチに下がる選手も出て、苦しい時間帯に。第３クォーターではついに逆転を許します。それでも、最後まで諦めないのがこのチーム。残り１分を切った時点でスコアは拮抗。息をのむ攻防の末、67 対 66、わずか１点差で勝利をつかみ取りました。

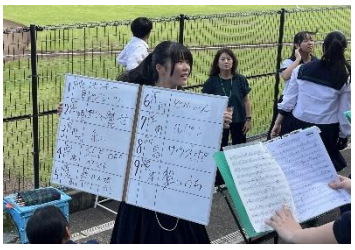
ベンチの仲間たちの声援、保護者の方々の手拍子や応援の声、そしてコート上の選手たちの集中、すべてが一体となった見事な勝利でした。この勢いのまま次戦でもチームとして成長した姿を見せてくれることを期待しています。

～野球部　秋季大会～

一方、野球部はセンバツ出場を目指して秋季大会の熱戦を続けています。

２回戦目、この日（10/18）の会場は多摩地区の立川球場、対戦相手は明大中野高校です。前回の駒沢球場では吹奏楽部の演奏が制限されていましたが、今回は応援三部（吹奏楽楽・チアリーダー部・応援同好会）が揃ってスタンドに陣取り、秋空の下、初めて全力応援が実現しました。

中間考査最終日という日程でしたが、試験を終えた生徒たちは答案用紙を出すやいなや学校を飛び出し、電車を乗り継いで会場入り。プレーボールの声とほぼ同時に応援席が埋まりました。

試合はまさに「ツーアウトから」の展開。二松学舎の得点はすべて二死から生まれました。粘り強く、諦めない、それがこのチームの売りなのか。ピッチャーは最後まで冷静に投げ抜き、見事な完投勝利。堂々と３回戦への切符を手にしました。

応援席の一体感、グラウンドに響く打球音、そして選手たちのひたむきさ。一戦一戦の勝利を糧に、センバツの舞台をぜひ自らの手でつかみ取ってほしいと思います。